



ウッドデザインでつながった17社の思いの結晶「木育トラック」

ウッドデザインの進化を訪ねて 木育トラック「manaviba」 2024年受賞 優秀賞（林野庁長官賞）



空間に設置された味わいのある木製遊具の数々

緒に使う大人にも使いやすい空間に落とし込むため、細部にまで工夫が凝らされている。

「授乳室は閉鎖的にならないよう上部を開放し、空間のつながりを持たせました。椅子の下も収納にするなど、無駄なスペースを極力なくし、広々と使えるように設計しました」。

さらに、年齢や発達段階の異なる子どもたちや大人までも夢中にさせる、様々な木製玩具や遊具を搭載、これらの玩具や遊具も一場さんがデザインや素材を考えたもの。子どもたちが親子での遊びや会話を通じて、木材の特性や魅力を体感できるように樹種、形状を工夫した。

地域との連携と木育の可能性

式になれば良い活動がもっと広範囲で実施できると思いい、協力させていただきました。手すりの制作を手掛けたのですが、安全性を確保しつつ、なかで遊んでいる子どもたちが外からでも見えるようにデザインの工夫をしました」。

木育トラックは、2023年6月に本格稼働を開始し、首都圏を中心に木育活動を展開してきた。単に木育体験を提供するだけでなく、地域との連携も重視している。移動式の木育広場として各地のイベントなどを通じて地域住民との交流を促し、木育の輪を広げている。災害時には避難所などへ出向き、子どもたちの心のケアや遊び場所の提供を行う。2024年元日に発生した能登の震災後も、安全な遊び場が欲しいという要望に応じて現地へ向かった。「木育トラックは地域の方々と共に創



授乳室やWifi環境も備え、子育て層の利便性も高い

「本物の木」の空間で森への理解を育む
ウッドデザイン賞を通じて交流を深めた17社の協力を得て開発された、木育促進のための革新的な移動型拠点「木育トラック」。その発案者が(有)一場木工所代表の一場未帆さんだ。自身も見舞われた災害時、会社にあった木のおもちゃをかき集め被災地支援に向かった時の子どもたちの喜びや、木育のワークショップで木のおもちゃで熱心に遊ぶ子どもたちの笑顔をみて、この笑顔を引き出す「木」がもつ魅力で子育てをサポートしたい！と発案したという。

長年、木製玩具の製造・販売に携わるなかで、子どもたちはもちろんその親世代の木への理解不足と関心が薄れていると肌で感じていたという。

「木は、私たちの生活に欠かせない資源であり、日本の最大の資源です。しかし、都市部を中心に、親子が木に触れる機会は減少し、木に対する関心も薄れてきています。この状況を何とかしたい、例えば思わず立ち寄りたくなるデザインと多機能で便利だと思える施設があれば、より多くの親子に、森林環境を健康にする大切さと木の良さや素晴らしさを伝えられるのでは、とそんな思いから『木育トラック』の開発をスタートしました」。

開発にあたって最もこだわったのは、「子どもたちが安全に、そして楽しく本物の木と触れ合える空間」を実現すること。車両提供はいすゞ自動車(株)の協力を得た。同社経営業務部門 広報部企業市民活動推進グループ 中内美千代さんはその経緯をこう語る。「弊社はこれまで富士山の植林活動を実施してきましたが、森を循環させる



車載型ゆえの制作の課題も
技術と信念で乗り越えた

り上げていくプロジェクトです。地域で想いをもって木育や環境教育活動をされている方と連携し、地域の方を主役として、地域で経済的自立ができる木育を広げていければと考えています。また、災害時には心理的不安を取り除く木の効果を利用した安全で安心な木質空間を提供していきたい。そのためにも全国に広げていきたいです」。

前述のいすゞ自動車(株)の中内さんは、「弊社は全国に拠点がありますので、例えば木育トラックで全国キャラバンを実施するなどの場合に、各地域のドライバーがつかないでいくといったことも考えられます。木育と自動車の組み合わせによる社会貢献を今後も進めていきたいと思っています」と語る。

同じく山二建具(株)の二村さんは言う。「私たちが千葉県内で手掛ける木育ではものづくりもやっていて、技術者不足の解消という面でも重要な取組と考えています。木育トラックを運用しながら、この製品はどんな技術で誰がつくっているか、子どもたちにそんなストーリーも伝えて、ものづくりに関心を持つてもらえるように思います」。

持続可能な社会の未来を描いて

昨今の木材利用の低下や花粉症誘発



木の温もりを五感で味わえる、
移動式の木育空間だ

次のフェーズへ活動を切り替えたところ、にタイミングよく今回のお話をいただきました。いすゞ自動車(株)は、「運ぶを支える」ことがミッションです。木材やそこから生まれた製品も運びます。木育トラックを通じて、子どもたちに木のこと、それを運ぶことを学んで欲しいと考え、参加させていただきまし

移動式ならではの設計・制作の苦勞も

トラックの荷台部分には、(株)フォレストワンや(株)中本造林から提供された広島県産のヒノキを使用し、壁面には(株)サカモトの埼玉県産ヒノキとスギ、天井にはキートック(株)の千葉県産スギの木質化粧シートの木目を生かして使用することで木の温もりを感じられる空間を創出した。手すり部分は同じくパートナーを名乗り出してくれた山二建具(株)が担当した。同社副社長の二村和広さんはこう振り返る。

「一場さんとはウッドデザイン賞を通じて知り合い、もう8年目になります。木育活動は各県でいろいろな取り組みがありますが、トラックを使って移動

の要因となっている人工林の伐採の停滞や、気候変動により発生する自然災害など、様々な要因で山の生態系の健康が損なわれているという。森林自然保全のために木を「伐って・使って・植えて・育てる」ことに関わる林業や木材利用業者の役割が重要となっていると一場さんは語る。

「私たちがより良い状態の森林自然環境を次の世代に引き継いでいくこと、それが私たち大人全員の使命だと考えています。木育は、そのための重要な手段の一つです。子どもたちが木と触れ合い、自然を愛する心を育むことで、持続可能な地球環境保全の実現に貢献できると信じています」という。

この言葉からは木材のプロとしての使命感と未来に対する真摯な願いが伝わってくる。ウッドデザインを通じてつながった様々なプロ集団の連携により、木育トラックは形になった。異なるリソースが集い、ひとつのゴールを目指していく。木育トラックはまさにウッドデザインの目指すところの素晴らしい実践例なのである。



能登の震災後も現地で安全な遊び場の提供を行なった